

高校現場最前線

No.258

【岩手県・専修大学北上高等学校】…①

校長 阿部 伸



開かれた校舎で学ぶ生徒たち

「問い」から自分軸を育てる

未来を創る学びの実践①

本校が進める教育改革のもう一つの柱は「なぜ学ぶのか」という問いの共有と「どう学ぶか」という選択の保障である。その実現のために、学びの設計図とも言えるシラバスの刷新に着手し、ディプロマ・アドミツション・カリキュラムの3ポリシーを明文化した。それと建学の精神、校訓を基に、生徒に求める八つの力——思考力・表現力・探究力・協働力・社会性・創造性・実践力・自己理解力を定義した。

各教科・科目では、これら八つのうち「どの力をどう育成するのか」を明示し、初回授業で生徒とその目的を共有するようにしている。さらに、シラバスには各単元に「基礎・標準・発展」の3段階の到達目標を設定し、それぞれに

具体的なやるべきことと、できるようになることを記述。生徒は自身の志望や現在の学力に応じて目標レベルを選択し、自らの学びの方向を定めることができる。この仕組みにより、教員が提示する目標と生徒の主体的選択が交差し、意味ある学習が構築されている。

自分軸を育む「SENTAN」

さらに、探究型学習の中心として本校が整備しているのが、総合的な探究の時間「SENTAN」である。ここでは学年や学科、専攻の枠を越えて生徒が混在し、多様な視点が交わる場を意図的に設計している。その中核を担う「SENTANゼミ」では、各教員が自身の専門に基づく問いを提示し、生徒がそれに応答しながら探究を

深めていく形式を採っている。

ここで特に重視しているのは「一次情報」である。文献だけに頼るのではなく、現場へのインタビュや体験を通して自身の関心を掘り下げ、主観と客観を行き来しながら「自分軸」で探究を進めていく姿勢を育てている。

こうした学びの統合と発信の場として、年に一度「SENTAN DAY」を設けている。ここでは、異教科教員によるコラボレーション授業が行われる。例えば「化学×家庭」での「おいしさとは何か?」、「公民×数学」での「選挙と議席配分」、「商業×自動車」での「車を取り巻くマーケティング事情」など、教科を越えた知の統合により、生徒が答えのない問いに向き合い、自らの価値観を言語化・再構築する学びを行う。

また、日常的な授業や探究に加えて、始業前・放課後・長期休暇には課外プログラム「専北塾」を

設置している。3DCADやデザイン、ボランティア活動など、生徒が自らの興味をさらに深める機会を意図的に提供している。これにより、学校全体が「多様な知に出合い、つなぎ、意味づける場」として機能し始めている。

再挑戦を支える新しい評価システム

評価の在り方にも改革を加えた。2023年度からは学問探究専攻、2024年度からはディープラーニングコース全体において、定期テストを廃止し、単元ごとの積み上げ型評価へと移行した。単元テストでは、ペーパーテストに加えてプレゼンテーションやレポートなどのパフォーマンステストも導入し、「知識・技能」だけでなく「思考・判断・表現」を含む多面的な評価を行っている。

最大の特徴は、「やり直しが可能な評価」である。例えば1学期の単元テストを、3学期に再受験

し成績が向上した場合、その点数を1学期の成績に反映させる方式を採用している。これにより、生徒は一過性のテストに左右されず、時間をかけて自分なりの理解を積み上げていくことが可能となる。真の学力育成に向けた再挑戦の機会が保障されることは、生徒の学習意欲を高めると同時に、教員にも授業設計や指導法の改善を促す契機となっている。

これらの改革を支えるのが、教員の学びである。月に1回、職員会議の時間を削減して生まれた時間を活用し、校内研修を実施している。研修では、探究の理念共有からシラバス作成、ICTの活用方法まで、さまざまなテーマに取り組んでいる。また、教育と探求社の「マイクエスチョン」などの教材を用い、教員がファシリテーターとして実際に探究を体験し、問いの意味と価値を体感するOJT的要素も取り入れている。

さらに、外部支援体制も整ってきている。メンター制度やDX推進アドバイザーの導入、北上市との連携協定による協働プロジェクトの推進など、校内の人的資源だけでなく、地域や外部の力を積極的に取り込むことで、より開かれた学びの実践につながっている。

そして、2025年4月に本校の新たな挑戦として、通信制課程がスタートした。これまで培ってきた「ディープ・アクティブ・ダイバーシティ」の3本柱を軸に、より柔軟で多様な学びの場を構築していく。この新たな展開は、時間や場所、背景を超えて「学びたい」という意志に応える教育の可能性をさらに広げるものである。

本校の改革は、「学校」という枠組みを問い直すところから始まっている。生徒一人一人を主体とし、問いを生み出し、他者と交わり、世界とつながる場へ。その実現に向けて、改革は続いていく。